

# 動物を通して家族をつくる

## カナダ・イヌイトの生業システムにみる世界生成の秘密

大村敬一

おおむら けいいち / 大阪大学、AA 研共同研究員

社会をつくるのが生物学的に決まっているわけではない人類が集団をつくってともに生きることは自然なことではない。

そのために人類はどのような工夫をしているのだろうか。

ここでは、カナダ北極圏の先住民であるイヌイトが拡大家族という集団をつくるために編み出した「生業システム」という工夫を紹介し、この問いについて考えてみよう。

筆者がお世話になっているイヌイトの拡大家族の人びと。2009年2月。



カリブーを仕留めたイヌイトの少年。1993年8月。



海氷上でのアザラシ猟。2005年2月。



西はシベリア東端から東はグリーンランドにいたる広大な地域の、森林限界ラインの北側に位置する東西約10,000キロ、南北約6,000キロの極北ツンドラ地帯に住む狩猟採集民、イヌイト/ユピク (Inuit/Yu'pik) のうち、カナダ北極圏に住む人びとがカナダ・イヌイトと呼ばれる。このイヌイトの村の一つ、クガールクで筆者はフィールドワークを行ってきた。

### 「ともに生きる」ことの困難

独りしていると寂しいのに、あまり長い時間、皆で一緒にいると、どこか鬱陶しくなる。このようなことを感じたことはないだろうか。

人類は生活をともにする群居性動物であっても、アリやハチのように社会をつくるのが生物学的に決まっている社会性動物ではなく、それゆえに、孤独に生きることができる。ここに、私たちが皆で一緒にいると、鬱陶しく感じる理由があるのかもしれない。それでも、私たちは現実には集団をつくり、ともに生活している。このことから、人類には集団でともに生きる能力があるのもたしかである。

こうした条件、すなわち、孤独でありつつ他者とともに生きうという条件の中で大小様々な集団をつくって維持しているのが、人類という生物種の特徴であるようだ。だからこそ、近代国民国家体制を準備した社会契約という装置が考案されたのだろう。自然状態ではばらばらな人間を繋げて集団をつくるためには、寂しさへの恐怖や他者への愛という感情的な動機があったとしても、孤独を選ぶこともできる勝手気儘な人間を束ねる何らかの装置が必要なのである。

それでは、そうした装置には、社会契約のほかに、どのようなものがあるのだろうか。そして、それは私たちに何を教えてくれるのだろうか。ここでは、イヌイトが拡大家族という集団をつくるために編み出した「生業システム」という工夫を紹介し、この問いについて考えてみよう。

### イヌイトの生業システムの仕組み

イヌイトの生業システムは、これまでの極北人類学の研究から、次のような循環

システムとしてモデル化することができる(図1)。

まず、イヌイトが狩猟・漁労・罌猟という生業技術によって動物と「食べ物の贈り手(動物) / 受け手(イヌイト)」という関係に入る。同時に、このとき手に入れた食べ物などの資源をイヌイトの間で分かち合うことで、イヌイトの日常的な社会関係の基礎となる拡大家族が生まれ出される。分かち合われる人びとの範囲は拡大家族だからである。このときに重要なのは、イヌイトの世界観では、生業を通じたイヌイトと動物の関係として、次のように互いを助け合う「互恵的關係」が目指されることであり、その結果として、食べ物を分かち合うことが食べ物を得るためのルールになることである。

イヌイトの世界観では、動物は「魂」(tagniq) をもち、身体が減んでもその魂が減ることはないとされる。ただし、この動物の魂は、イヌイトがその身体を分かち合って食べ尽くさねば、新たな身体に再生することはできない。そのため、動物の魂は新たな身体に再生するために、自らの身体をイヌイトの間で分かち合われるべき食べ物としてイヌイトに与えることになる。このことは、イヌイトの側からみれば、食べ物という生存のための資源が与えられることになるので、イヌイトは動物の側から助けられることになる。つまり、イヌイトが目指す世界では、「動物はイヌイトに自らの身体を食べ物として与えることでイヌイトの生存を助け、イヌイトはその食べ物を自分たち(拡大家族)の間で分かち合うことで動物が新たな身体に再生するのを助ける」という互恵的な関係が成立するのである(図2)。

こうした世界観により、イヌイトは動物

に対して「食べ物の受け手」という劣位にある者として、動物から与えられた食べ物を自分たちの間で常に分かち合わねばならないことになり、分かち合いが食べ物を得るためのルールになる。イヌイトの間で食べ物が分かち合わねば、動物の魂は再生することができなくなるため、動物はイヌイトに自らを食べ物として与えなくなってしまうからである。

ここで重要なのは、このルールをイヌイトに課するのは動物であって、イヌイトでないように工夫されている点である。そのため、イヌイトの間では、誰が誰に対しても命令することなく、誰もが食べ物を得るために同じルールに従って分かち合う信頼と協調の関係が生み出される。イヌイトは分かち合いのルールを課す命令を動物に託してしまうことにより、自分たちから「支配／従属」の関係を厄介払いし、皆が平等な立場で協調し合う信頼の関係を確立しているのである。

しかし、この代償として、イヌイトには動物を家畜化する道が閉ざされてしまう。もしイヌイトが動物を家畜化して支配したり管理したりすれば、分かち合いのルールをイヌイトに課するのは動物ではなく、その動物を家畜化して管理するイヌイトになってしまう。イヌイトの間で平等な信頼の関係が成立するためには、動物はイヌイトの誰に対しても優位な立場にあらねばならない。こうしてイヌイトは家畜化を行うことができなくなり、動物に従属する弱者の立場から動物に働きかける技、つまり「誘惑」の技を駆使する狩猟や漁労、罾猟に徹する

イッカクジラの解体。2012年8月。

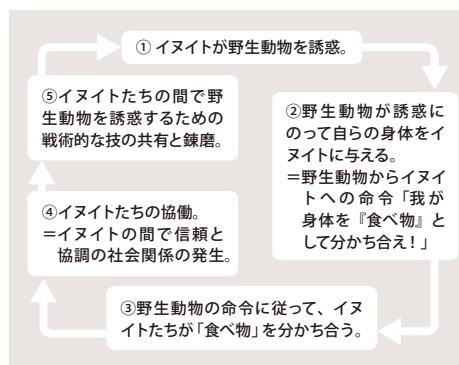


図1 イヌイトの生業の循環システム。

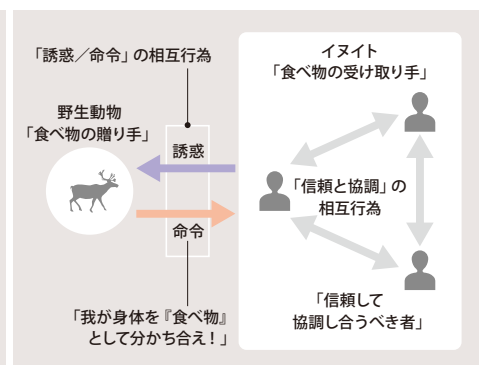


図3 イヌイトと野生動物の関係。

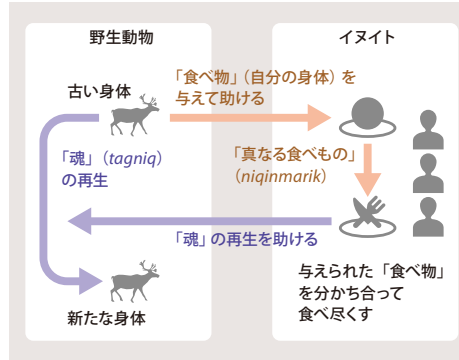


図2 イヌイトの世界観におけるイヌイトと野生動物の関係。

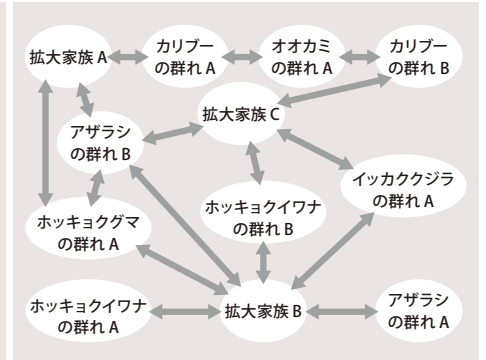


図4 「大地」(nuna) の概念図。

ことになる。

さらに、「分かち合い」は、食べ物だけでなく、生業のための技術や知識の分かち合いを促し、協力して獲物をとる協働を動機づける。生業活動で得られる食べ物が常に分かち合われるため、横取りや裏切りを心配することなく、生業活動をともに行えるからである。むしろ、生業で得られる食べ物を独り占めできず、常に分かち合わねばならないのであれば、狩猟や漁労を単独で行ったり、技術や知識を独占したりすることに大きな意味はなくなる。こうして技術や知識を共有して一緒に働くことに積極的な意味がでてくる。

このように共有が当たり前になると、生業のための知識と技術は豊かになってゆく。その結果、イヌイトが新たな動物たちとの間に「食べ物の受け手として分かち合いの命令に従う者(イヌイト)／食べ物の与え手として分かち合いを命令する者(動物)」という関係に再び入る可能性が増すことになる(図3)。そして、この関係が成立すると、すべてが生業の出発点に戻り、もう一度、同じ循環が繰り返される。

**動物を通して家族をつくる：世界を生み出す装置としての生業システム**

こうしてイヌイトと動物の間の「誘惑／命令」の関係が、イヌイト同士の「信頼と協働」の関係と絡み合いながら循環してゆくと、イヌイトにとって「信頼して協働す

べき者」としての「イヌイト(の拡大家族)」と「誘惑する対象にして、その命令に従うべき者」としての「動物」が異なる種類の者として浮かび上がってくる(図3)。もちろん、この循環過程で更新されてゆく動物との関係は、ひとつの動物種に限られるわけではなく、様々な動物種との間に結ばれる。そのため、イヌイトの拡大家族は、生業を通して複数の動物種と循環的に維持される諸関係の結び目となる。つまり、様々な動物の群れが相互に連結したネットワークの中に位置づけられながら、その結び目のひとつとしてイヌイトの拡大家族が生みだされるのである(図4)。このネットワークこそ、「大地」(nuna)と呼ばれるイヌイトの生活世界に他ならない。

このように動物との関係を巻き込みながら「大地」という生活世界を生みだし、その「大地」に埋め込まれた拡大家族をつくりだして維持するイヌイトの生業システムから、私たちは次のようなことを教えられる。ともに生きる集団をつくるということは、人間同士の関係を調整するだけでなく、周囲の生態環境との関係を巻き込みながら、世界をまるごとつくることでもある。ともに生きる術とは、他の動物種も含めた生活世界の全体をつくる術であり、それは、近代国民国家体制の基盤となった社会契約のように人びとがともに生きる術だけでなく、人間はもとより様々な動物種とともに生きる術をも含むのである。